

神将形二天彫像について 上

猪 川 和 子

一 序

二 一对としての二天像

(一) 諸門に安置の二天像 (二) 門以外に安置の像

三 藤原時代までの二天像

四 藤原時代以降の二天彫像の形式

(一) 相称形 (二) 準相称形 (三) 東大寺中門形 (四) その他

附 表

五 中国の二天彫像

六 結び

一 序

神将形の二天彫像の例は少なくないが、それらはしばしば四天王の四軀の中、二体が残った像であると説かれることが多い。勿論実際に四天王の中の二軀が失われて、残った二天である場合もあり得るであろう。しかし、わが国に現存する神将形の二天像の例を通観し、文献に現われる幾つかの例、また中国の例を参照するとき、実際にはそういう場合はさほど多くはなく、二天は四天王とは別の一組の像として意識的に作ら

神将形二天彫像について 上

れている場合が非常に多いのではないかと考えられるので、各時代の作例を集め、その性格を究めた結果、形式上においても幾つかの分類の中に納められるものが多いことがわかった。

しかし、神将形の二天彫像を造る場合、他の神将形、四天王や十二神将などと全く離れた形式に造られることはあり得ず、ことに四天王とは、限られた服制と姿態、とくに名称の上で極めて密接な関係をもって作られていることは云うまでもない。すなわちわが国最古の神将形像が法隆寺の四天王であることを考えるまでもなく、四天王を度外視して二天像を考えることは不可能である。従来、四天王については多くの優品、基準作ともに先学がすでに説かれているので、それらを参照することとはかなり可能である。しかしまだ、わが国の四天王については集大成される段階には到っていないので、図像的な面でもまだ説明されていない部分も少くない。今後さらにその研究が進めば二天彫像に対する考え方も或いは改めるべき点も出てくると思われるが、一応ここでは二天像の文献に現われた造立の状況、集め得た作例による形式分類、中国における作例の考察などを行って、二天彫像の様相を幾分でも明らかにした

いと意図している。

二 一対とし

ての二天

像

神将形の二天彫像

には、安置の場所の

上で大きくわけて二

つの種類がある。その一つは寺

の門その他の、入口に一対とし

て配される、守門神の役割をも

つと思われる像であり、他の一

つは、中尊寺金色堂須弥壇上に

安置されている二天像の如く、

左右に立つて須弥壇上の本尊を

讃仰し守護する役割をもつ像と

の二種である。

守門神としての二天像につい

ては、文献的にも後述するよう

に種々の記載があり、二天像が

四天王とは異なる二軀一対の像と

して、諸寺の門に置かれていた

ことがわかる。わが国の二軀一

挿図1 某氏蔵 春日社寺曼荼羅 部分

挿図2 大阪四天王寺 千手観音及二天箱仏

挿図3 奈良十輪院石仏龕 二天

対の守門神としては、仁王がまず注目されるが、ここでは、その服制が神将形をなしている二天にのみ限って考察する。神将形の二天像の中には、金剛力士と名づけられている三月堂の須弥壇上の二軀一対の像のような例がある。金剛力士は仁王の別称ともされているが、ここではその名称の如何に拘わらず、身に甲をまとっている点で、神将形二天像の範疇に加え、仁王像とは区別して考えたい。守門神としての役割は、二天像も仁王も変りないと思われるが、安置の状況は、多くは大門に仁王、仏堂に近い中門に二天が安置された例が多い。興福寺、春日社寺曼荼羅画像等もその様を示している^{註1}。仁王の場合、わが国の作例としては、おおむね一方が口を開く阿形、他方が閉じる吽形をなしているのが通例で、二天も、屢々例外はあるが、同様阿吽形をなすものが多い。但し、四天王像においても、阿吽は任意に行われており、阿吽形は必ずしも二天の条件とは限らないが、一応注目すべき特徴をなしている。

寺の門に安置された二天像、堂内に安置された二天像のいずれもが後世移動するおそれがあるのに対して、固定した位置に造られた二天像の例として、大阪四天王寺の千手観音及び二天箱仏がある。千手観音坐像を本尊とし、龕の左右の扉の内側に当る部分に、片手をあげ、片手を腰

にあてて、相称形の二天像が彫出される。像高約五センチの小像であるが、朱や緑の彩色も鮮やかに、巧緻な手法で彫られ、本尊が、峯定寺の千手観音坐像と共通した様式が見られる処から藤原末十二世紀頃の作と考えられる。内扉に彫刻され、固定した位置で本尊あるいは門を守護する形が明瞭である点注目される。

もう一つの例に、奈良十輪院の石仏龕の門に近い部分に刻出された二天像の例がある。この龕は本尊地藏を中心に、諸仏、廿八宿梵字等の浮彫と線刻で構成された鎌倉時代の石龕である。高さ二・四メートル、十余年前修理の際、塗りこめられていた部分から二天像の陰刻が発見された。向って右に持国天、左に多聞天が、やや古風な表情と姿態で刻出されており、他に四天王、仁王等が一群の像の中に含まれる。固定した形の諸尊構成の中の一对の二天の例として注目される。しかもこの二天の一方は塔を捧げた多聞天で、他方は略々同形の持国天と思われる像で、相称でない形式をもつ点が、一对としての二天であり乍ら、形式の多様さを示す好例である。

次に諸寺の門に安置の例の個々について記そう。

(一) 諸門に安置の二天像

諸寺の門に安置されていた二天像に関する文献は、大江親通の七大寺日記、七大寺巡礼私記等にしばしば見出される。それらの記載の中に、現在実在する像との関連が窺われる例も幾つかある。これらの記載には、各々の天部の名称に相違があったり、幾らかの矛盾した点も見出されるが、通観すると、二天像の各々についての組合せに、ある系統の別

があることがわかる。奈良東大寺中門像における「持国天」「多聞天」の組合せと、奈良元興寺の「持国天」「増長天」の組合せの系統などがそれである。諸寺の門についての文献とその作例を、奈良、京都の地域順に記そう。

現在江戸時代の像が安置されている東大寺中門の二天像に関して、七大寺日記に「中門二天可見可尋」とあり、七大寺巡礼私記南中門の項に、「北門南面有二天像高二丈余」と単に二天像として名をあげるが、菅家本諸寺縁起集、(南都七大寺巡礼記)には、東大寺中門堂及び、中門の項で、

後戸北面毘沙門天鞍馬寺毘沙門影向之所也略一

中門 安二天像 此内東方毘沙門不可思議也 同西大寺中門像也

という記載がある。北面毘沙門天が鞍馬寺毘沙門天と同じであるというのは、注目すべき記載で、美術研究二二九号の兜跋毘沙門天に関する小論中にもふれたように、鞍馬寺の本来の毘沙門天は兜跋形であったと思われるのである。現在東大寺中門に安置の約一丈の持国天、多聞天の中の、向って右は地天女に足を支えられた西城風の服制の兜跋毘沙門天像である。おそらく大江親通の頃も、南部七大寺巡礼記の筆者と推定されている尋尊の頃も、中門の一方の天部が同じ兜跋形であったと考えて差支えないであろう。さらに東大寺要録南中門の項では、

延喜二年壬戌聖宝僧正造中門供養奏聞公家…

と記される。聖宝が延喜二年に中門に二天像を造ったことは、一代要記などにも出ており聖宝僧正伝も記す所である。聖宝伝には中門に二丈余の二天像を作るとあってその尊名はわからないが、おそらく現像に近い

形式の像であつたろう。

東大寺統要録造仏篇 東大寺雜記第一には、大仏師快慶と定覚、その他の彩色絵師等によつて、建久五年十二月廿六日に造り始められた南中門二天が「東方多聞天」「西方持国天」と記される。ところが、覚禪抄の「諸寺中門二天事」の中では

多聞 増長例東大寺 二天共増福也
求財増益二法也

と載せ、この各像の名称の相違についてはここではその理由を明らかにし得ない。東大寺諸伽藍略録朱注、その他によれば、現在の二天像は、大仏師法橋順慶の作で、享保二年（一七一七）に作られ、大仏殿内兩脇侍とともに江戸時代に復興された像であることがわかる。

西大寺についても南都七大寺巡礼記に

中門、在四王堂前、安二天像同東大寺也

と、やはり一方が鞍馬寺様の多聞天であつたことを記している。

今は失われた奈良元興寺の二天像について、七大寺日記に

中門、二天并八夜又ノ像心ヲ静メテ可見言語道断セル也、夜又ノ左ノ手ニ蛇ヲ取、右ノ手ヲロシコフシヲニキリ可見

とあり、巡礼私記には

同門（中門）二天像并八夜又等不可思議也其中左方天後壁東柱際立夜又、左手取蛇右手作緩拳二開口天右ニ引□国之様不可思議物也

とある。いずれも二天とのみ記され、各像の名称は記さない。ところ

が、覚禪鈔の諸寺中門二天事^{註2}の記載中に、「持国増長証元興寺」とあつて、その各の像の名称を明らかにしているが、本朝仏法最初南都元興寺

由来には「多聞天と持国天と八夜又」であると記されるなど、違う名称

となっている。しかし、この元興寺像を模して作つたと伝えられている神護寺中門像は、持国、増長と呼ばれており、また、東宝記に記される、元興寺像を模したという東寺の二天も持国天と増長天であつたらしいから、ここでは一致しているわけである。両像の名称の混乱は早くからあつたものと思われ、東宝記にも、二天の事今は詳らかでないと記すところを見てもわかるであろう。

奈良興福寺について七大寺日記、巡礼私記には中門の額のことは記すが、像に関してふれていない。興福寺流記、南中門一基の項では、宝字記、延暦記に四王二軀と從鬼八口ありと記し、宝字記は神王二鋪云々、延暦記には從鬼各四口云々とあり、その当初の状態を想像することが出来る。治承兵火後、建久五年（一一九四）には中門二天礼拝の記載が玉葉に見られ、再建されていることがわかり、興福寺濫觴記中門の項に

東持国天西増長天八夜又各立像各長一丈四尺五寸 各八尺五寸 右各応永年
中春日大仏師成慶造之

と、両像の名称が明記されている。これらの記載から、創建当初より後世まで同じ安置像の制が守られていたものと毛利久氏は考えられている。^{註3}また、京都国立博物館本興福寺曼荼羅に、中門二天立像と、各像に從鬼立像三軀ずつを配してあるのは、省略かあるいは一鬼ずつが失われていた当時の描写であろうと推定される。

奈良永久寺においては、弘長四年に大仏師康円が常有院の二天像を造っているが、これは門に安置したとは記していないので、仏殿内に安置した例かもわからない。

奈良長谷寺について、南都七大寺巡礼記、長谷寺二王堂の項に「安金

剛力士并二天像也」とあり仁王と共に二天があったことが記される。

次に東寺についてみると、菅家本諸寺縁起集、教王護国寺中門二天の項に、

大師御作也… 朽損之間 仏師運慶堪慶作之云々

とあり、また東宝記中門の項には大仏師康譽法眼注進云として

二天作者 東康運、康勝、運助
西湛慶、康弁、運賀云々

古老伝云、根本安置像者、大師御作、多聞持国二天也、朽損不間、模元興寺
二天 造立之、東持国天、西増長天云々

と、もとの像は多聞天と持国天であったのを、再興に際して元興寺像にならって、持国、増長天としたと記しているのである。^{註4}聖宝が東大寺に造った像は多聞天と持国天であったと思われ、西寺の方は不明であるが、東寺像も同系であったのを、時代の好みからか、持国増長に変えた

神将形二天彫像について 上

挿図4 奈良東大寺中門 持国天 多聞天

挿図5 京都神護寺中門 増長天 持国天

挿図6 京都東福寺楼門 増長天 持国天

ということはおそらく、興福寺曼荼羅の画像に見られるような相称形の一对像に造られたものであろう。東宝記にはつづいて、理明房興然記として、諸寺門に二天を安置するのは「不空絹索自在王咒經」^{註5}にのつとって、壇の四方の門に守護神をおくことをした中に、東門外に二天王を画いてその門を護るのだと説く。ともに衣甲をつけ器仗を厳浄し、瞋怒の相を作り、眼が赤く、持物は持国天の方は手に劔、増長天は梶をとるとする。さらに注して「私云」とし、

当寺中門安持国増長二天 子細難知

と、何故に二天が安置されているか理由がわからないと云いつつ、持国天は東西南北の最初の東方天、増長天は南方天で南州擁護に縁の深い像なので安置したのであろうかと推定を加えている。また当初から二天像に配されていたと思われる夜叉神について、もと大門の左右に置かれて

いたところが、旅人が礼拝しないと禍を与えたので、中門の左右に移して安置したというが、この説は審かではないと附記してある。東雄夜叉、西雌夜叉の二夜叉が俱に大師御作也とあって、東寺の夜叉は東宝記当時は二軀であつたらしい。

京都醍醐寺については、醍醐寺新要録中巻の慶延記の記事の中に、金堂中門の二天についての記載がある。八咫即ち八脚門に、多聞、持国二天立像が安置され、これは前大僧正御房定海が造立したもので、保安元年十二月十六日に開眼供養を行い、作者は仏師院覚法眼であつたという。八脚門は二軀の像を安置する構造として適當であり、たとえば四天王を安置する四天王の例としては、京都金剛院や京都三条のだん王法林寺などがあるが、四天王安置の状況はいずれも、十二脚門に、四カ所の構の中にそれぞれ一体ずつの四天王を安置する。醍醐寺中門の二天像に関しては、後世に及んで、年中行事や拝堂のことが記されており、これについては後にふれる。

醍醐寺と関り深い聖宝阿闍梨は、西寺、東大寺二天のほか、貞観十六年に虚空蔵寺の二天像を刻み、尊像に箔を置いたという記録^{註6}もあり、平安前期の二天彫像造立の一端を窺うことができる。

京都神護寺中門にも、現在約一五〇センチの神将形二天像が安置されている。寺の古図によれば、中門と名づけられた門が二基あったが、金堂に近い一基は現在はない。神護寺略記 中門の項に

彩色二天像各一軀 彩色八夜叉像各一軀 右建久七年性我阿闍梨相具仏師運慶法印二下向南都、模写元興寺二天八夜叉安置之^{註2}

とあり、また覚禅鈔の「諸寺中門二天事」の持国増長証の項に、元興寺

の二天を建久九年に模して高雄東門に立てたと記される。この建久七年と九年のいずれかという点については、性我と運慶との交宜が建久八年から知られるところから建久九年であると毛利久氏は推定された。^{註7}しかし、現存の二神将形は、藤原末期の作風が窺われ、運慶作と考えるには相応しくない。また二天像の手法にも違いがあり、向って左側に安置する像は、奈良富雄の法楽寺像などに近いように思われる。或は運慶作の像が失われ、他の寺から移された古像かとも推定される。中門二字があつたこととの関係は全く不明である。神護寺中門は十二脚門で、運慶が元興寺中門像を模したとすれば八夜叉も安置される筈で、夜叉を別置することも可能であつたと思われるが、現在は夜叉に類する像はないというのである。

京都清水寺の二天について、清水寺縁起には、「塔院大門二天事」として、多聞天、持国天について記すのに、清水寺住侶慶兼が、修行のため信濃国御坂に到り、枯木の下に宿ったところ、大蛇に巻きつかれ危い時、清水寺の大門の左右に二天王像を安置する願を立てたところ靈驗あらわれ、事なきを得た。上洛ののち、当時清水寺別当であつた康尚が、このことをきき喜び、自ら二天像を刻んで安置した^{註8}というのである。

この縁起には多聞天、持国天とあるが、現在清水寺の轟門（中門）に安置される像は、向って右方像は経巻と筆を手にした広目天と考えられる像であるが、名称は詳かではない。左方像は持国天と呼ばれる像に多い形式である。ともに約一五〇センチ、寄木造、彫眼、藤原時代末風の像である。

京都東福寺の楼門にも二天像が現在安置されている。^{註9}東福寺開祖九条

道家は、東大寺、興福寺について、国利東福寺を創建しようと志した。建長二年十一月、道家は東福寺の建造物並寺産を処分し、「惣処分」一巻を作製したが、それによれば二階楼門に丈六尺の多聞、持国天各一体を安置したという。現在の像は約一丈で、丈六の大きさはない。東福寺志によれば、明徳二年九月に塔頭三聖寺が焼け、足利義満の命により十月廿七日に二天門が再建された記事があり、また、のちの天文十一年九月の頃に、慧山旧記の記事として、三聖寺中門の持国天増長天二像を大仏師（左京）康秀が彫刻した由を記す。この二天は現在の像の形相に対する名称としてより適当である。且、作風もやや古様ではあるが、服制に固さもあり、康秀の作にあててさほど無理がないであろう。本朝大仏師正統系図にも廿代康秀が三聖寺中門の二天を作ったことをのせる。寄木造、彫眼、阿吽形で全く相称形をなしている。

京都仁和寺にも、宝物館内と中門とに各々二天像が安置されている。「山州名跡志」に、中門南面安二天長五尺余二天持国天、多聞とあり、現存中門の像であろう。共に像高約一五〇センチ、それぞれ約七五センチの二夜叉鬼を従えており、持国天は阿形に口を開き、左手に戟、右手に三鈷をとる。

神将形二天彫像について 上

多聞天像も左手に塔を支えてはいるが、その他は略々相称形に近い姿勢で、口を吽形に結ぶ。この門は当寺第二十一世覚深法親王の建立と伝え、凡そ寛永頃に造られたと考えられ、二天も同時のものであろう。四体の夜叉が揃っている点注目される。

大阪金剛寺楼門に安置の多聞天、持国天像は共に約二四〇センチ、南面の本堂に対し、東面の門で、江戸の記録では中門註10と呼ばれていた。中の二天像は伝運慶作と称されるが、時代はもう少し後の鎌倉中期頃かと考えられる。玉眼、寄木造の堂々とした作。元禄の頃京都の大仏師運長

挿図7 京都仁和寺中門 二天及夜叉

挿図8 滋賀西明寺二天門 増長天 持国天

が再興したという。向って右の像は左手をあげ、右手を腰に畔形をなし相称形というべき姿に作られている。一方が多聞天と名づけられているが、塔を捧げる姿ではない。

滋賀西明寺の二天門の持国、増長天は像高約一七〇センチで、両像の胎内から出た銘札に、正長二年乙酉（一四三九）三月三日の年記と、大仏師法印院尋その他の作者の名が記される。^{註11}一方の手をあげ他方の手を腰にあてる相称形の姿で、寄木造、玉眼、阿畔形をなす。誇張した相貌と硬い衣の形式をもっている。

三重観菩提寺楼門に広目天、多聞天と称される相称形の像が、安置され藤原時代の像である。^{註12}これは仁王と背中合せに安置されている珍しい例である。

和歌山高野山の中門の二天像は、永治元年（一一四一）に稀代の妙工と伝えられた能光によって作られた。その後、慶長十八年に京の大仏師法印康正がまた改めて造立している。

福岡観世音寺にも、観世音寺文書に、別当邏宴大法師が、諸堂舎仏像を修理再興した記載の中に、「廻廊、中門二蓋、金堂者諸仏尊像二天」と列記するが、この記載以上にはわからない。

この他、東京浅草寺、^{註13}同有章院門、^{註14}栃木輪王寺等に江戸時代の作例があり、兵庫成相寺にも二天安置の門がある。^{註15}

以上、現在像が残っているものについては作例にふれつつ、諸寺の門に安置されていた二天像造立の状況を主として列記したわけであるが、これにより、門神としては、前記したように、東大寺中門二天の系統と、不思議な迫力があり、後世多くの寺に模刻を残した元興寺の持国

天、増長天の組合せと思われる二つの系統がとくに注目される。文献のみからは、像の形式までも推定することは困難であるが、一對としての二天像が決して一様の形式のものではないことは、後世の遺品に照しても明らかである。

かつ、守門神礼拝の対象としても相当に重要性を占めていたことは、醍醐寺の拝堂記の次第等に^{註17}明らかである。これらによって、二天尊崇の状況をもうかがうことができる。

(二) 門以外に安置の像

次に須弥壇上にあつて、本尊を守護し、讃仰する役割を果たすような位置に安置される二天と思われる像も、守門の位置に置かれる二天よりはるかに多くの作例が残っている。それらの一對の像もまた、二天、あるいは各々四天王中の四軀の中のいずれかの名をもっており、中には四天王中の二軀が伝えられているものも含まれる場合があることは勿論である。にも拘わらず、壇の四周にあつて、本尊を守護する四天王とは異なる、一對の二天を作るべき意図で造り、左右対立の形に二天が造られていたことは、文献に照しても、僅かな例ではあるが明らかである。たとえば、中尊寺金色堂の二天像について、後の記録ではあるが、吾妻鏡等に、^{註18}諸仏とともに「二天像」を作ると明記し、二軀の神将形が記録のままに現存している例など、これは明らかに四天王とは違った意識によって作られた二天の典型的な基準作例である。

さらに、二天の記録と現存像が結びつくもう一つの例としては、原本氏蔵の旧滋賀常光寺の多聞天像がある。その胎内銘に応安六年（一三七

三)の年紀ととも、^{註19}「二天」と墨書があり、

四天王の一体でも、独尊像でもないことが明らかである。この

像の形式は、平安時代以降の多聞天に通有の、塔を捧げる姿であって、これは中尊寺の二天とは別型の二天の一つになるわけである。つまり、形式的には中尊寺の二天のように、左右像が相称的に一対をなす二天とともに、一方が塔をもつ多聞天である二軀の組合せもあるということ

が、明記されている点が注目される。

挿図10 法隆寺玉虫厨子扉絵 神王像

八世紀から十一世紀におよぶ時代までの、二軀一対の神将形像は、現在門に安置される像には例がなく、すべて堂内に安置された形で伝えられている。

次の項目に、これらの、門以外の二天像を主として、大きく年代別に分けてその形式にふれつつ考察する。

挿図9 神奈川 原本氏 二天ノ一

三 藤原時代までの二天像

わが国における最古の神将形二天彫像としてあげられるのは、法隆寺五重塔塑造、南面弥勒像土の二軀の神将形である。右足を垂らした二軀共ほぼ同形の神将形で、小像ではあるが、顕真得業が著した古今目録抄にも二天として記載^{註20}があり、現在の像に後世の修理や彩色等が加えられているとしても、おそらく、八世紀に五重塔が造られた当初から安置されていたであろうと推定される像である。腰をかけた姿の神将形は、新羅の磚などには見出されるが、彫刻の上では珍らしく、わが国の二天彫像においては後世全く見られぬようである。

次に挙げられるのは、東大寺三月堂須弥壇上の金剛力士立像二軀である。七世紀に玉虫厨子に二神将形が画かれている絵画の例を別とすれば、わが七・八世紀の神将形彫像は四天王像が非常に多い。この期の四天王の各々の名称と像容の比較を行ってみると、形態上の制約というべきものはあまり現われておらず、例えば多聞天像にしても、平安時代以降の像が殆んど一定の形式に造られるようになるのに比べ、東大寺三月堂の四天王と、戒壇院の四天王の場合でも各自形態が異っている。しかし、神将形という形には自ら限界があり、三月堂の金剛力士像の場合もその形態は戒壇院四天王の中の二軀と共通の姿勢をもっていることに気づかれる。

四天王の信仰は、經典を通じて古くからわが国に伝えられたであろうことは、先学がすでに説かれる所で、これにより多く四天王が造られたと考えられている。二天像については、その經典の拠りどころとなるも

のは明らかではない。造立の記録としては、正倉院文書に見出される、石山院の六尺の二神王造立の^{註21}記事は、神将形二天を想像せしめるものである。

平安時代以降の二天像中、凡そ九・十世紀に属する時代の作と思われる像には、八世紀像に見られた様な形式の自由さがまだ強く残っており、三重神宮寺像(図版Ⅲ)、佐賀大興善寺像を見ると、二軀それぞれほぼ同形であり、奈良弘福寺、静岡南禅寺像も同じく二軀同形に近い。

しかし、焼失した延暦寺大講堂の二天像の^{註22}ように一方が多聞天であるが二軀がほぼ相称形の像が同じ頃に現われており、十・十一世紀に入ると相称形の像が著しく多くなるさきがけをなしている。叡山横川の恵心院は、右大臣兼家の子が永観元年十一月日に建てたが、そこには大日如来

を本尊として六観音^{註23}二天梵釈が安置されたという。

まず、九、十世紀頃の作である三重神宮寺の持国天総高一七九センチ、多聞天一八四センチは台座の邪鬼まで一木造、クスノキ材で、二軀とも兜をかぶり、甲をつける姿も細身に引締まり、表情は古様、衣文の彫りも深い。両手を同じ形にかかるく屈けている。この像の解説に四天王の中の二軀が残った像だと説くものがある。しかし、この像と、佐賀大興善寺像を比べると、それぞれが非常に近い形式に造られているのに注目される。大興善寺像は、神宮寺像よりやや後の十・十一世紀に近い作かとも思われるが、ヒノキ材の一木造、多聞天一四五・五センチ広目天一四七・五センチの動きの少ない直立に近い姿である。この二組の像は、伝えられた名称こそ違いはあるが、形式的には非常に近い姿である

ことは偶然とは思われない。それぞれその頃に行われていた二天像の形式を踏んで、造られ、今日まで伝えられた像であると考えられる。

飛鳥時代の川原寺の後である弘福寺に伝わる持国天、吽形一九〇センチ、多聞天、阿形一八〇センチは、顔や手に修理が施され、両手は共に肩先から後

挿図11 三重神宮寺 多聞天 持国天

挿図12 佐賀大興善寺 多聞天 広目天

補で、もとの形態は損われているが、邪鬼まで一木造のがつしりした体躯の像である。東大寺等の二天を作った聖宝は、元慶二年にこの弘福寺の別に補されている。この像との関りは知り得べくもないが、像の制作年代は九世紀と考えてよいであろう。確かに二天であ

神将形二天彫像について 上

挿図13 奈良弘福寺 持国天 多聞天

挿図15 滋賀 延暦寺 多聞天 持国天

六センチである。一木造、もとは彩色像だったと思われる。両手後補、右肩が両方とも上っている形式は弘福寺像と同じである。この像も十世紀ごろの作であろう。

宮城双林寺の二天像については、美術研究二一一号に久野氏が説かれているごとく、一木造で邪鬼まで共木の十世紀頃の像である。材はハリギリで、一方は右手を、他方は左手をあげ、足の形まで相称形で、口も阿吽をなしている。

註

1 京都国立博物館蔵の興福寺曼荼羅はじめ、春日社寺曼荼羅と呼ばれる画は多数残っているが、画中の興福寺伽藍の諸像の中、四天王や仁王とともに二天像が画かれている。この某氏蔵春日社寺曼荼羅には、京博本のように二天の脇に三軀ずつの夜叉を配

るとは決め難い像で、四天王の残存像である可能性もあるが、阿吽の顔つきには一對の二天であつてもよい要素も含まれている。

挿図14 静岡 南禅寺 金剛力士

唐招提寺講堂の持国天、増長天も、共に約一三〇センチの小像であるが、両手は後補があり、もとの形態はたしかではない。これも阿吽の口の形に、或は一對の意識があるかと思われるもので、この点弘福寺像と同様である。

静岡南禅寺像は、金剛力士と称されており、阿形一五一・五センチ、吽形一六

してはいないが、凡そ十五世紀頃の画幅と考えられる。

- 2 覚禪鈔 卷百二十二 金剛力士の項に、「諸寺中門立二天事」として、「多聞持国証」、「持国増長証」、「多聞増長例」の各々について記される。

- 3 国華七七八、七八〇号、「興福寺曼荼羅と同寺安置仏像」上・下 毛利久博士論文。

- 4 本朝大仏師正統系図によれば東寺中門像は建久元年再興という。

- 5 不空絹索陀羅尼自在王呪経卷下 大正蔵二十卷 成就入壇法分第十三の中に、不空絹索神呪壇法がとかれており、

：於壇四面各開一門。去門不遠皆堅雙柱、種々莊飾吉祥門。：壇東門外画二天王守護其門。左辺応作 持国天王 右辺応作 増長天王 俱被甲器仗嚴淨 作瞋怒面眼光赤色 持国天王以手執劍 増長天王以手執棒 壇南門外 応画二王守護其門 左辺応作醜目天王 右辺応作赤目神王 此之二王面皆黑色 赤金嚴身皆被衣甲 其手執持弓箭刀劍 壇西門外画二葉叉王守護其門 左辺応作末尼跋達羅葉叉王 右辺応作布栗拏跋達羅葉叉王……壇北門外画二天王守護其門 左辺応作多聞天王 右辺応作金剛手天王 画此二王各依本色……

この記載によれば東門を守る神將と、北門を守る神將とは異なることを示している。しかし、現在所在する門の位置と像との配置がもとのままであるかどうかを推定する事は不可能に近い。また文献にのこる諸寺の門の各々の面する位置と現存安置の諸像とがこの経の説く通りとは云いがたい。一応参考に挙げるに留める。

- 6 理源大師寔録下 (大日本史料一ノ四)

- 7 仏教芸術一三、「神護寺中門二天と元興寺二天像」毛利久博士論文

- 8 大日本仏教全書 寺誌叢書第一 清水寺縁起 塔院大門二天事

- 9 福山敏男博士の示教による。

- 10 大日本古文書 家わけ第七 金剛寺文書四三四

- 11 「比叡山」―その歴史と文化― 昭和二十九年十月刊、叡山文化総合研究会報告書、鈴鹿雅正氏論文「西明寺二天門造営年代考」

- 12 楼門外側左右に金剛力士、内側の左右に二天が安置される。二天共に一七〇センチ、阿吽をなす。広目天は左手をあげて三叉戟をとり、右手は腰にあて、多聞天は右手をあげ独鈷をもち、左手を腰にあてて相称形の像である。彫眼、平安後期の像であるという。未調査であるが安置形式が独特なので、附記して置く。

- 13 東京浅草寺の二天門の像は、東京都教育委員会金山正好氏の御指示によれば、寛永寺の四代徳川家綱公廟殿有院勅額門に廂があり、そこに安置されていた二天像が戦後移されたものである。厳有院門は当初の門が焼け、三代家光公の仏殿から流用したと推定されており、廟に置かれた二天は、家光公の時代より更に古いものかと推定されている。作風も有章院門等の京仏師の作とやや異なり、何れかの寺から移安されたものであろうという。玉眼、寄木造、像高約一五〇センチの相称形の像である。

- 14 東京有章院(徳川家継)靈廟二天門の像については、本朝大仏師正統系図に廿八代康伝の項に「享保二年二月有章院様増上寺御靈屋御尊体御尊牌并四天王御門二天王」を造ったことが記される。現在東京プリンスホテル前に安置するこの門は八脚門であつて、四天王を安置することは出来ないから、二天を安置する門を四脚門と呼んだわけである。この二天像も向つて右は持国天らしく、右手を腰、左手に戟をとる。左は巻物と筆をもつ広目天像で、きわめて自由に四天王中の二昧を作つており、この様な二天造像の例も間々あつたものであろう。極彩色の、約二メートルの像で、門にも享保二年の棟札があり、大仏師康伝が作者として知られる。

- 15 栃木輪王寺には広目天、持国天と称される相称形、阿吽の二天の門と、夜叉四体が安置される夜叉門とがある。二天は像高約二二〇センチ、夜叉は約一四〇センチの極彩色の像である。(日光山内国宝修理事務所松田良助氏の教示による。)徳川実紀によれば慶安四年(一六五二)から承応二年(一六五三)頃の作である。

- 16 兵庫成相寺の門には向つて左に左手に塔を捧げる多聞天、右に右手をあげ剣をとり左手を腰にあてて阿吽形の像がある。寄木、玉眼の高さ二メートルの像、近世の作と思われる。

- 17 中門に安置された二天像が諸堂巡礼の行事の折に、特に礼拝の対象となっていたことが、醍醐寺新要録の慶延記の記事にかなり細かに記されている。上古の年中行事に、中門毗沙門講が行われ、御仏への供米が一石だった記事のほか同記延徳の年中行事によると、二天講が毎月行われていたらしい。また、文永十年の年記のある結縁灌頂類(三宝院篇)の記載の中で、伽藍の護法神を讀上げる時、東寺ではまず東二王、次西二王、次伽藍護法の順であり、醍醐寺では最初多聞天、持国天をよみあげるとある。

同新要録下巻卷第十五拝堂篇の御堂巡拝の記録には、中門二天に関する拝礼の記載

仏拝之時ハ香呂ニ念珠、独古取具之、左手ニ念珠、独古持具之、右 檜扇計也：凡
神拝ハ二度 仏拝ハ三度也……。二天拝ハ先持国天、後多聞天……とある。

これらは南北朝から室町時代頃の二天札拝の模様を記したものであるが、中門二天
像に対するこの様な札拝は古式の作法の名残と考えられるのではないであろうか。神
拝、仏拝、それに用いる檜扇のことなど、興味ある記録であり、東寺千手観音像の腕
に元慶元年の年記ある檜扇を納めた例があることも、決してかりそめの思いつきとは
考えられず、仏拝と関係深い扇を意識して納めたものとも思われる。二天札拝にも檜
扇を用いていた慣習は、藤原時代の優美な檜扇の幾つかの遺品とも関わりがあったか
も知れない。

東寺に関しては東寺長者拝堂記に、金堂、経藏 塔を参拝してから中門に到り、二
天を拝してのちに鎮守中門を入るといふ観応元年頃の記載等がある。

以上のようにさほど古い時代の記録ではないが、その札拝次第は、単にこれらの寺
のみの行事ではなく、恐らく他の諸寺でも同様に行われていたであろう。

18 吾妻鏡文治五年中尊寺事 の項に「金色堂……阿弥陀三尊二天六地藏定朝造之」と
ある。

19 原本氏の多聞天は像高七四・二センチ、寄木造、頭部一材で首を胴に納さし。彫眼。
体躯前後はぎで、底部にはぎ目がある。足は別木。もと彩色像だったと思われるが、
全身真黒く、右手を屈げて塔を捧げる形は珍しい。胎内に左の様な墨書銘がある。

(胎内腹銘) 仏師三条民部法橋同三位

(底銘)

(同背銘) 奉造常光寺二天

常光寺二天

近江国

願主寿山第四代長老

甲賀

仏師

仏師三条民部法橋同三

三位

法橋

且那光信 上大原村

三条

應安六年 登

願主口信

部法橋

願主舜悟 且那

應安六年六月一日

三位法橋

光信

20 法隆寺太子伝古今目録抄 上 塔の項 南面 弥勒菩薩施羅脇侍法蘭林大妙相二王二
天等眷属一々御坐弥勒押閻浮檀金……

がある。或は中門にて立ち乍ら二天を各々拝するとか、二天儀として「先東方天前帖
上役人敷 御三拝 鼻広地上 役 又令着鼻広給 役人取草座 又敷西方御座上 又昇立御三
拝鼻広訖、着鼻広自石橋 降立東行 前後共奉人調然……(鼻広―あさ否の鼻のあるもの)」
とある。釈迦堂 金 供僧拝堂略記(法印定超曆応四六十六遂之)によれば
「拜事、路次ハ用鼻広 拜殿ニテハ刻橋ノ際ニテ草鞋ニハキカヘテ正面ヨリ内へ入……
神将形二天彫像について 上

挿図16 鳥取大慈寺 増長天

21 大日本古文書 卷之五 天平宝字六年、造石山院所勞劇帳正倉院文書

造石山院所、……

奉造塋觀世并一軀、

宝字五年十一月十七日奉始、六年七月五日塋了、…八月十二日彩色了、

神王二柱並磯坐 各高六尺
塋并彩色并共奉作了

22 近江古美術大觀第四輯

23 新校群書類從第十九卷叡岳要記 下

四 藤原時代以降二天彫像の形式

藤原時代以降の神將形二軀一具として現存する例を集めて通観すると、形式的にきわめて顕著な特色のあることが知られる。それは、藤原初期の鳥取大慈寺像はじめ中尊寺金色堂二天像、滋賀金鉢寺、石山寺二天像（図版Ⅳ）その他の如き相称形の像が非常に多いことである。四天王の場合も、平安時代以降には、四天の中の二天、主に持国天と増長天が相称形をなしている例が多くなると軌を一にしている。例えば九世紀の東寺講堂の四天王は、各像皆右手を上、左手を下方におく姿であるが、法隆寺大講堂四天王像や、兵庫円教寺の四天王像などになるとその中の二軀をとり出すと相称といえる形式をもつ像が含まれてくる。二天像を作る場合も、あるいは四天王の二軀、持国天、増長天と呼ばれるものに多い一对の相称形を二天の代表的な形像として意識し作つたためであるかも知れない。この種の二天の例は多い。

次に多いのは、延暦寺の持国天、多聞天のように、一方が塔を捧げる像で、相称形の像との違いはただ塔を捧げるといふ点にのみあって、その他は殆んど相称形の像と変りないので準相称形と名づけた。

つぎに注目されるのは、同じく一方が多聞天であつて、必ずしも相称形には作られていない東大寺中門像と近い形式のものが幾点か見出される。多聞天が兜跋をなす例は東大寺像のみであるが、その他の部分の形式が似ているものを東大寺中門形とかりに名づける。

その他は、あるいは二天としての一对の意識が稀薄とも云える例をも含め、種々の形式の二神將形について順次述べることにする。